

戦略的創造研究推進事業  
(社会技術研究開発)  
平成28年度研究開発実施報告書

「安全な暮らしをつくる新しい公／私空間の構築」

研究開発領域

「養育者支援によって子どもの虐待を  
低減するシステムの構築」

黒田 公美

(理化学研究所脳科学総合研究センター  
親和性社会行動研究チーム、チームリーダー)

## 目次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 1. 研究開発プロジェクト名 .....                 | 2  |
| 2. 研究開発実施の要約 .....                   | 2  |
| 2 - 1. 研究開発目標 .....                  | 2  |
| 2 - 2. 実施項目・内容 .....                 | 2  |
| 2 - 3. 主な結果 .....                    | 2  |
| 3. 研究開発実施の具体的内容 .....                | 3  |
| 3 - 1. 研究開発目標 .....                  | 3  |
| 3 - 2. 実施方法・実施内容 .....               | 3  |
| 3 - 3. 研究開発結果・成果 .....               | 4  |
| 3 - 4. 会議等の活動 .....                  | 9  |
| 4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....          | 10 |
| 5. 研究開発実施体制 .....                    | 11 |
| 6. 研究開発実施者 .....                     | 14 |
| 7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など .....   | 15 |
| 7 - 1. ワークショップ等 .....                | 15 |
| 7 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など ..... | 17 |
| 7 - 3. 論文発表 .....                    | 21 |
| 7 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） ..... | 21 |
| 7 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等 .....             | 24 |
| 7 - 6. 知財出願 .....                    | 28 |

## 1. 研究開発プロジェクト名

「養育者支援によって子どもの虐待を低減するシステムの構築」

## 2. 研究開発実施の要約

### 2 - 1. 研究開発目標

本プロジェクトは、子ども虐待を行った、またそのおそれのある養育者に対する支援システムの開発および社会実装にむけた提言、またそのために必要な科学的根拠を示すことを目標とする。

### 2 - 2. 実施項目・内容

1. 日本における子ども虐待の要因解明と効果的な支援策を探るため、虐待対応の専門機関・養育困難層への先駆的な支援事例の調査、在日外国人家庭の養育困難の実態調査、地域コホートデータを用いた子ども虐待リスク関連要因の解明
2. 仏英でのシンポジウム・セミナー開催と児童保護行政・養育者支援体制の国際比較調査
3. 愛着障害の生物学的マーカー同定に向けた愛着障害児と対照群の脳機能・オキシトシン受容体（OXTR）のメチル化研究、ならびに乳幼児を育てる養育者（母親）の養育ストレス状態と社会的認知に関する機能的MRI実験
4. 子ども虐待刑事事件における養育者側要因の解明に向けた質問紙調査と脳科学的解析
5. メンタルヘルス問題のある親への先駆的な養育支援活動の訪問調査、要保護児童対策地域協議会でのメンタルヘルス問題のある養育者対応と支援体制の量的悉皆調査

### 2 - 3. 主な結果

1. 虐待や養育困難は多くの場合複合的要因によって起きるが、早期に適切で手厚い支援を提供することで深刻化を防げる場合がある。具体的に、母子ひとり親、夜間就労層、知的障害児、外国籍などへの支援事例について調査を実施した。地域コホートの分析からは、養育者の育児重圧感や不安感は子どもへの健やかな関わりを妨げるが、パートナーの育児協力や支援センターの利用などにより軽減されることが明らかになった。
2. 児童保護と養育者支援の連続性、アソシアシオンやNPOなど民間機関の役割、機関間の連携をよくするための取り組みなどについて知見を得た。
3. 愛着障害を呈する被虐待児と対照群を比較した結果、前者は脳機能やオキシトシン受容体（OXTR）のメチル化において、その他の発達障害とは異なる特性が見出された。また、養育ストレスが社会的認知の機能低下を引き起こすこと、本成果を現場での養育困難リスクのスクリーニングの補助に活用する方途を見出した。
4. 来年度以降の脳科学的解析に向けた予備的検討が完了した。
5. メンタルヘルス問題のある親への先駆的支援事例の概要を整理する一方、要保護児童対策地域協議会における支援実態の解析を進めている。

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### 3 - 1. 研究開発目標

##### (1) 解決すべき問題

子ども虐待対策ではこれまで、被害児童の保護・支援に重点が置かれてきた。しかし、抜本的な問題解決には、虐待してしまう養育者への支援が不可欠である。にもかかわらず、子どもへの支援に比べ、養育者への支援は大幅に遅れている。その理由は、下記の2種類に大別される。

##### ○ 子ども虐待の発生メカニズムの科学的根拠に基づく理解と普及が不十分

対応困難な子ども虐待は、子側の要因を含む育児負担・社会的孤立・貧困などの環境要因と、過去の生育歴や生物学的要因に起因する現在のメンタルヘルス問題の、両方が重なった場合に、特に発生しやすくなる。しかしその解明には、自然科学と社会科学が連携した研究が必要であり、効果的な養育者支援法開発に必要な科学的根拠が不足している。このことが、養育者の援助希求・協力を引き出す上でも障壁になっていると考えられる。

##### ○ 日本の社会福祉制度、行政・法制度固有の問題

家族に子どものケア・福祉を大きく依存する日本固有の歴史的・社会的風潮を背景とし、日本の児童福祉行政は諸外国に比べ予算配備が不十分である。その結果、親子支援を担う専門職の人員及び育成過程が大幅に不足している。さらに、人権に十分配慮しながら家族に公的介入するための法制度とその執行を支える人的資源にも制約があり、効果的な養育者支援普及の妨げとなっている。

これらの課題を解決し、養育者とその家族全体を支援することで虐待を防止する公／私協働の体制作りが、抜本的な問題解決のために必要である。

##### (2) 本プロジェクトの目標

本プロジェクトは、家庭における子どもの安全を最終目標とし、そのために科学的根拠に基づく養育者支援システムの構築を中・長期目標とする。その実現のため、本プロジェクト期間の3年間では、医学・脳神経科学などの自然科学と、家族社会学・法学をはじめとする人文社会科学の研究者、さらに社会福祉分野の専門職や虐待の当事者が協働して、**個々の家庭の困難に最適な支援オプションを柔軟に供給しうる養育者支援システム**を開発する（G1-4、下図ロジックモデル参照）。そしてその**社会実装に必要な行政・法制度改正や倫理的課題への対応を提言する（G5）**。このことにより、子どもの家庭内の安全確保に留まらず、親子の愛着形成促進を介して犯罪・精神科医療などの社会的コスト削減、養育者の負担・ストレス低減を介する就労率上昇や少子化抑止など、長期的な社会福祉・経済的価値の創出が期待される。

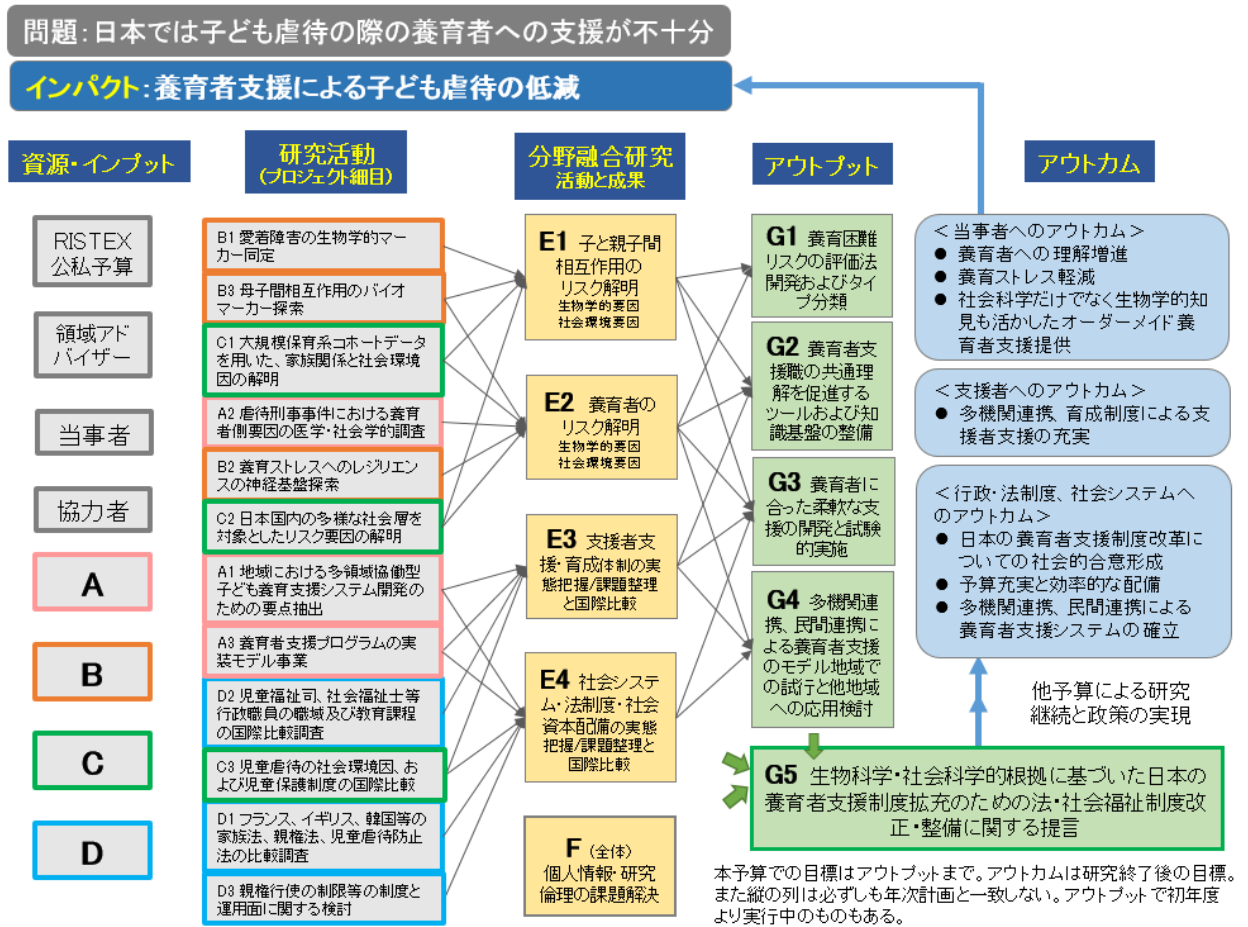
#### 3 - 2. 実施方法・実施内容

プロジェクト全体は、下図のロジックモデルに沿った段階的な活動を行っている。

今年度は「プロジェクト細目」から「分野融合研究」への移行期間であり、下記にE1-E4ごとにまとめた、A1~D3の細目ごとの内容を記す。

研究の内容が多岐にわたるため、細目ごとの実施方法を結果と別々に記載すると煩雑に

なる。そこで方法も主として3-3に結果とあわせて記載する。

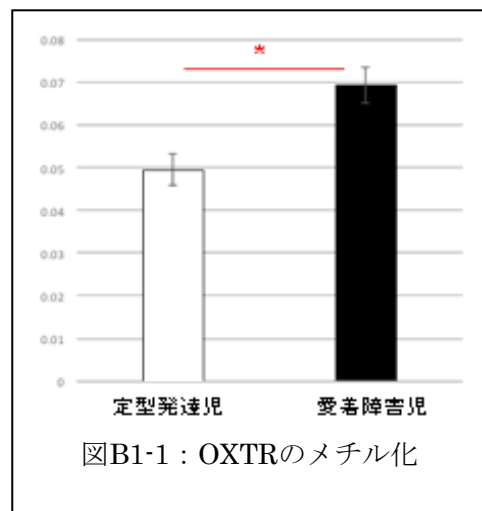


### 3-3. 研究開発結果・成果

#### E1 子と親子間相互作用のリスク解明

##### 愛着障害の生物学的マーカー同定 (B1)

愛着障害とその他の小児精神疾患 (e.g. 発達障害) との鑑別診断を目的として、生物学的マーカーの同定に取り組んでいる。愛着障害を呈する被虐待児13例と対照群36例を対象に安静時脳機能イメージング (Resting-State fMRI: rs-fMRI) を行った。中間成果として、社会脳に関わる紡錘状回や角回などの賦活値上昇という結果が得られており、これまでに我々が得ているその他の発達障害とは異なる賦活パターンが見出されている。今年度も引き続き症例を追加し、鑑別の感度・特異度を上げていく予定である。



また同様の目的として、被虐待児45例と対照群41例を対象に唾液サンプルを収集し、DNAメチル化について測定した結果、愛着に関与するオキシトシン系について検討したところ、オキシトシン受容体（OXTR）遺伝子領域のメチル化において群間差が認められた（図B1-1）。本研究結果より、OXTRのメチル化は、愛着障害のバイオマーカーとなる可能性が示唆された。今後は本領域メチル化の程度と愛着障害児群内における脳画像との相関領域を見出し、愛着障害の病態メカニズムに迫るとともに、バイオマーカーとしての精度も高めることを目指す。

さらに、虐待やネグレクトを含む不適切な養育を受けた反応性愛着障害児20名と対照群（定型発達児28例）を対象に、オキシトシン点鼻単回投与の脳機能に関する効果を認知課題施行時の機能的MRIを用いて評価した。現在、脳画像データと生物学的マーカーや対人関係指標との関連について、データを解析中である。本研究から得られる成果は、反応性愛着障害の病態解明および病態特徴に基づく治療薬開発を目指した臨床応用への発展に貢献すると考えられる。

### 母子間相互作用のバイオマーカー探索（B3）

親子の脳機能ネットワークの特質と実際の親子間交流の関連性を明らかにするため、6～12歳の子とその養育者12組を対象にrs-fMRIを行い、また、親子コミュニケーション時における行動計測を行った。親子コミュニケーションは、「協調」「自己制御」「自己表現」の三因子から構成されるかかわり指標を用いて評価する。具体的には、かかわり指標で推奨されているゲーム課題を用い、ゲーム時の親子のコミュニケーションをビデオ録画している（図B1-2）。課題時の親子の関わり方を、脳・内分泌機能の観点から評価する。今後は、平成29年度前期にこれまで取得したデータについて中間解析を行い、30組のデータ取得を目指す。



図B1-2：ゲーム課題

### 大規模コホートデータを用いた、家族関係と社会環境要因の解明（G1）

地域コホートデータを用いて、2002年、2005年、2008年時点での0～3歳児の子どもの養育者271名を、子どもが6～9歳（小学校低学年）になるまで6年間追跡した。6年間追跡可能であった214名（子どもの年齢：6歳 43名、7歳 78名、8歳 65名 9歳 28名、子どもの性別：男児105名、女児109名）を分析の対象とし、0～3歳、3～6歳、小学校低学年の3時点における子ども虐待リスク関連要因を推定した。操作的定義として、「子どもに健やかな環境を提供できない」「子どもに健やかな食を提供できない」場合を「ネグレクトリスク」と捉え、「子どもと環境との健やかなかかわり」「子どもの健やかな食の状況」と「子どもの要因」「養育者の要因」との相関分析を行い、相関係数を算出した。「子どもと環境との健やかなかかわり」「子どもの健やかな食の状況」を目的変数、「子どもの年齢と性別」、相関分析において10%水準で有意な関連の見られた「子どもの要因」「養育者の要因」を説明変数とした重回帰分析を行い、回帰係数を算出した。また、「子どもを週に3回以上たたく」場合を「身体的虐待リスク」と捉え、「子どもをたたく」を目的変

数、「子どもの要因」「養育者の要因」を説明変数とした単変量ロジスティック回帰分析、多変量ロジスティック回帰分析を行い、オッズ比を算出した。目的変数、説明変数の詳細は、別添資料C1-1の表1～3に示した通りである。

「子どもと環境との健やかなかわり」については、全ての年代において、養育者の育児に関する重圧感や不安感との間に、有意な負の関連が示された。子どもが0～3歳の時点では、パートナーと子どもの話をする、パートナーの育児協力がある、育児相談者がいる、育児協力者がいる、支援センターの利用がある場合に、健やかなかわりと有意な正の関連が示された。ここでのパートナーとは配偶者の代わりとなるものも含んでいる。0～3歳の時点で育児相談者や育児協力者がいることは、3～6歳時点、小学校低学年時点の健やかなかわりにまで影響していることが示された。多変量的にみても、育児に関する重圧感や不安感は、「子どもと環境との健やかなかわり」を阻害する要因であることが示された。とりわけ、0～3歳では、育児協力者がいる場合、支援センターを利用している場合に、健やかなかわりを支援することが示された（表4）。「子どもの健やかな食の状況」についても、ほぼ同様の結果が示された（表5）。「子どもをたたく」については、0～3歳時点では、ひとり親である場合、養育者の育児に関する重圧感や不安感が高い場合に、リスクが高まることが示された。3～6歳においてもほぼ同様の結果であるが、支援センターを利用している場合に、リスクが軽減する可能性が示されている（表6）。育児困難感（重圧感、不安感）が高い場合、ひとり親である場合に、ネグレクトリスク、身体的虐待リスクが高まる可能性が考えられるが、育児に関する相談者や協力者がいること、支援センターなどが適切な支援を提供することでそのリスクを軽減できる可能性が考えられる。

## 日本国内の多様な社会層を対象としたリスク要因の解明（G2）

虐待対応の専門機関に加え、養育困難層への支援事例の調査を実施した。虐待はしばしば貧困やひとり親、心身の病気や障害、孤立といった複合的要因が重なり発生するが、適切な社会的支援があれば深刻な虐待に至らないケースもあること、また、望まない妊娠を経て周囲からのサポートがない状況で出産した場合、出産当日から虐待するケースが多いことから、若年妊産婦への支援が必要であることなどが確認された。

在日外国人家庭の状況は、国籍による違いが大きい。認知を受けない外国出身母子世帯の増加により、言語面での支援ニーズが高まっている。今年度重点的に調査した在日フィリピン人家庭では、フィリピンにおける貧困、ひとり親家庭、言語や文化の違い、国籍の違いによる権利の違い、また注目すべき点として移動の時期、斡旋業者に対する債務、雇用主＝保証人という移動や労働の自由を強く制限する移動要因などが複雑に絡み合い、養育困難につながっていた。また、在日ブラジル人家庭のフォーカス・グループ調査では、レストラン経営などビジネスで成功した第一世代と工場などで働く第二世代の移民のあいだの差異が浮き彫りになった。

## E2 養育者のリスク解明

### 虐待刑事事件における養育者側要因の医学・社会的調査（A2）

虐待刑事事件67例に研究協力依頼を各刑務所宛に送付、同意を得た20人に、生育歴、事

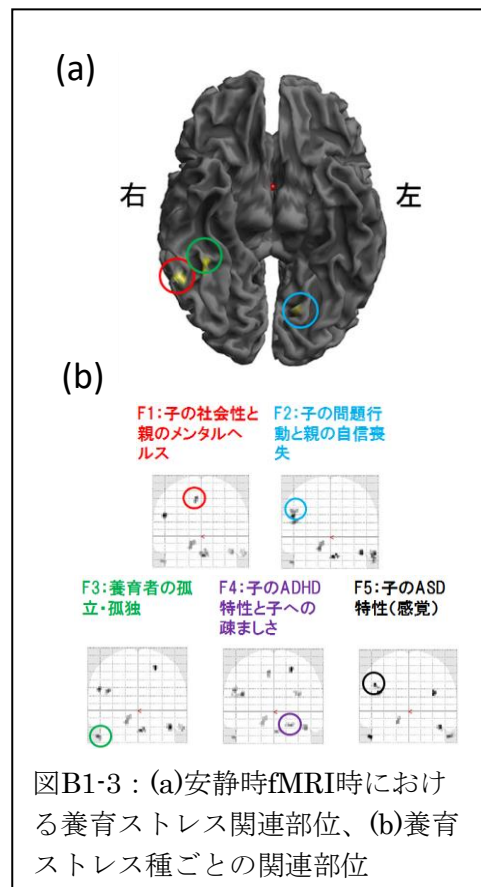
件当時の家族構成や経済状況などの社会環境要因、精神疾患等の既往およびパーソナリティ特性（SCID）、Adverse childhood experience（ACE）等について質問紙調査を行った。来年度以降の脳科学的解析に向け、理化学研究所内3TMRI撮像装置にて、構造MRI及び拡散テンソルイメージングの予備的検討を行った。

### 養育ストレスへのレジリエンスの神経基盤探索（B2）

乳幼児期の子どもを育てる養育者（母親）36例を対象に、養育ストレス状態が社会的認知およびその神経基盤に及ぼす影響を機能的MRI実験により検討した。養育者の抑うつ気分がより高まると、社会的認知（共感性）課題を遂行中の右腹側前頭前野の活動が有意に低下したが、課題成績との相関はなく標準のままであった。社会的認知の機能低下に先立って社会脳の機能低下が生じるという前駆現象と解釈された。養育ストレス状態が深刻化する前の予防的指標の開発に繋げるため、本成果を特許出願した（特願2017-39071）。

また、広く地域保健センターで利用可能な子育て困難感の客観的評価ツール（ノート型コンピュータによる社会的認知機能の簡易的評価ツール）の開発に取り組んできた。育児環境指標ICCEの「制限や罰の回避領域（叩く躰け指向）」のリスク分類に基づき、リスク有群と無群を設定した。リスク有群では、育児ストレス指標PSIの子ども側要因がより高く、社会的認知（表情認知）機能の評価成績がより低かった。本成果が資する簡易な客観的評価ツールの開発は、現場での養育困難リスクのスクリーニングを補助する役割を担い、早期対応に効果的な養育者支援に繋がるものと期待される。

さらに、rs-fMRIを用いて、PSI(Parental Stress Index)で特定される養育ストレス各種と相関する安静時脳機能部位を特定した。養育ストレス全般では、右下側頭回、右紡錘状回、左舌状回における自発的脳活動との相関が確認された（図B1-3a）。また、養育ストレス種との関連性では、ストレス種ごとに脳活動のパターンに差異が確認され（図B1-3b）、安静時脳活動が、養育困難リスクの評価法およびタイプ分類に資する可能性が示唆された。中等度の疾患レベルに達する養育ストレスを抱える養育者の安静時脳機能についても取得済みであり、今後は解析データに加えて、同様の傾向が確認されるかについて検証する。またA2で取得した脳画像データも加え、脳科学的な観点から養育困難のリスクを解明する。



### E3 養育者支援・支援者支援・育成体制の実態把握/課題整理と国際比較



### 地域における多領域協働型子ども養育支援システム開発のための要点抽出 (A1)

メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯支援に対する先駆的支援活動例を抽出し、直接訪問調査を実施。①北海道浦河町、②福岡県大牟田市、③沖縄県糸満市、④三重県四日市市、⑤長野県須坂市への調査を実施、取り組みの概要を整理。また要保護児童対策地域協議会の調整機関を対象に、メンタルヘルス問題のある養育者への対応と支援体制等の実態の量的悉皆調査を実施、解析に着手した。

### 養育者支援プログラムの実装モデル事業／親権行使の制限等の制度と運用面に関する検討 (A3・D3)

分科会「警察・検察、精神保健福祉と児童福祉連携による養育者支援の可能性」（平成28年4月）「東京連絡会」（平成28年6月）、養育者プログラム実践者協議会（平成28年12月）を実施、諸外国や国内先進例を参考に、多機関協働での養育者支援の方策を検討した。公開シンポ「公私連携による養育者支援プログラムの活用」（平成29年1月）では支援プログラム紹介、活用促進のため厚労省関係者を交えた意見交換を施行。養育者プログラムモニター事業をスタート、平成28年11月に1ケース（PCIT）を開始し、現在継続中。1名は次年度よりMY TREE受講予定。

### 養育者支援（保育園・児童養護施設・アソシアシオンなど）の国際比較調査 (C3)

フランスおよびイギリスで現地調査を実施した。パリでは保育園、幼稚園や母子支援センター、福祉乳児院、児童保護施設等の調査を行い、日常的保育と児童保護の連続性、重層的な養育者支援と支援者支援、アソシアシオンによる手厚い在宅支援などについての知見を得た。

イギリスではマンチェスターとブリストルで現地調査を実施した。さまざまなタイプの保育所のほか、収監経験のある女性や、虐待を受けた子どもを支援するチャリティーなど民間団体の調査を行った。チルドレンズ・センター内の保育所では、全3・4歳児への週15時間の無料保育を中心とするユニバーサルな支援を提供している。一方、児童保護計画のもとにある子どもへの支援は、分離支援と在宅支援に分かれる。分離支援は全体の23%で、里親と施設が担う。在宅支援は行政と民間団体の通所施設が担っており、虐待につながり得る特別なニーズを抱えた子どもも利用できる。これら三段階の支援は相互に連続・重層しており、民間団体も大きな役割を果たしている。また、里親・施設委託児の教育を支援する「ヴァーチャル・スクール」という機関がある。

## E4 社会システム・法制度・社会資本配備の実態把握/課題整理と国際比較

### 児童保護・養育者支援のための司法関与に関する外国法制の比較（仏・英・韓） (D1)

仏・英・韓の法制度について、文献調査を行い、司法の関与の性格及び程度に応じて、「民事司法型」「行政主導型」「刑事司法型」に分類、特徴づけて分析を行った。フランスについては、現地調査を行ったが、少年事件担当判事制度及び同判事の担当する親権制限が司法関与の要であることは確認できたものの、判事へのインタビューは先方の都合によりキャンセルとなり、行政的関与の調査にとどまった。

外国法との比較による知見を基礎に、日本の現行法下における児童福祉法と親権法との

関係について、厚生労働省における立法論議に現れた資料等に基づき検討をし、立法論のみならず、現行法において養育者支援のために現存している行政的及び司法的な手段の活用に課題があることを明らかにした。

### 児童虐待の社会環境要因および児童保護制度／児童福祉司、社会福祉士等行政職員の職域及び教育課程の国際比較調査（C3・D2・A1）

フランスおよびイギリスで現地調査を実施した。パリでは、英仏の研究者とパリの行政の児童保護担当者、NPOのソーシャルワーカーなどに参加していただき、研究打合せと国際会議を開催した。またC・D合同で児童福祉課やCRIP（憂慮情報収集室）、小児精神科医を訪問し、多様な専門家の協働、親身の司法的介入などについての知見を得た。

ブリストルでは、ブリストル大学の研究者らとセミナーを開き意見交換を行った上で、社会サービス局の子ども担当ソーシャルワーカー、虐待判定に従事する高等小児科医らの聞き取りを行った。イギリスではかつて機関間の連携不足によるケースの取りこぼしが問題となっていたが、2004年の児童法で新たにSafeguarding Children Boardという専門委員会が設置され、市内の児童保護業務の指揮、ならびに機関間の連携に特化した業務を担っている。またソーシャルワーカーは柔軟に警察の協力を得て調査を行うことができる。

#### 3 - 4. 会議等の活動

| 年月日        | 名称               | 場所                 |                      | 概要  |
|------------|------------------|--------------------|----------------------|---|
| 2016/7/19  | 領域とのSkypeミーティング  | Skype              | 黒田・白石・領域総括、領域アドバイザー  | 計画書のさらなる修正についての議論を行った。  |
| 2016/8/16  | プロジェクトミーティング     | 東京連絡事務所・Skype      | 主要メンバー               | 計画書の変更についての確認、各グループの進捗状況報告、ロジックモデルについての議論を行った。                |
| 2016/8/23  | 領域とのミーティング       | JSTサイエンスプラザ, Skype | 主要メンバー、領域総括、領域アドバイザー | 計画書の変更、ロジックモデル等について説明をし、領域からの助言を受けた。                          |
| 2016/8/23  | フランス訪問に向けたミーティング | JSTサイエンスプラザ        | グループCを中心としたメンバー      | フランス調査訪問に向けて、落合が現地の家庭福祉、児童福祉のシステムを報告した。                       |
| 2016/11/30 | Skype勉強会         | Skype/ライブストーリーミング  | 主要メンバー               | 他分野に専門性がわたるメンバー間の共通理解を高めるための勉強会の第1回目として、グループA・Bから脳科学の知見を紹介した。 |

|               |            |                 |                      |  |
|---------------|------------|-----------------|----------------------|--|
| 2017/<br>1/7  | 領域H28報告準備会 | 理研東京連絡事務所       | 主要メンバー、領域総括、領域アドバイザー | 平成28年度の成果報告と今後の展開に向けての討議を行った。                                  |
| 2017/<br>2/16 | 分析打ち合わせ    | 日本保健医療大学        | グループBとC              | 養育者のリスク解明に向けたコホートデータ分析に関する討議を行なった。                             |
| 2017/<br>4/2  | Zoom勉強会    | Zoom/ライブストリーミング | 主要メンバー               | 他分野に専門性がわたるメンバー間の共通理解を高めるための勉強会の第2回目として、グループC・Dから社会科学の知見を紹介した。 |

#### 4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

<地域：東京都、成果の受け手：養育者、児童相談所>

A3/D1 本研究予算を試験的に利用した養育者支援プログラムのモニター事業は現在、1名がPCITプログラム後半、1名がMY TREEプログラム電話スクリーニングを施行し、次年度に受講開始予定である。さらに司法や児童福祉と民間の養育者支援プログラムの連携を促進する仲介業務を行う「コントロールセンター」の仕組みを開発中である。

<地域：東京都・神奈川県・兵庫県・岡山県・山口県・愛媛県、成果の受け手：支援者とくに児童福祉司、精神保健福祉士、保健師、要対協メンバー等専門職>

A1 本研究成果に基づき、メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯の実態と支援に関する関係職員向けの研修資料（パワーポイント）を作成した。前年度に広く試行評価の結果を受けて修正し本調査研究から得られた新たな知見も加え改訂した。その上で、本年度においても子ども虐待対応の現場職員を対象とした研修会やシンポジウムなどで活用し、一部は受講者からの評価票も回収して現在分析中である。よりわかりやすくコンパクトな研修資料づくりに向けて改訂作業を重ね、今後は受講者や開講時間に応じた内容選択のモジュール化、さらにはリーダーに対するチームマネジメント研修プログラムの開発へと展開したい。なお、この研修プログラムは「全国児童家庭支援センター協議会」の実務者研修会のほか「全国子ども虐待防止ネットワーク」の研修テーマとして取り上げられ、従来よりも幅広い層と地域の支援関係者に開示することができた。引き続き、児童福祉、精神保健医療福祉、要対協などの職員の認識共有とエンパワメントを目指した研修プログラム開発を展開する予定である。

## 5. 研究開発実施体制

### ■マネジメントグループ

- ・リーダー:黒田公美(理化学研究所・脳科学総合研究センター)
- ・実施項目:黒田は全体の事務連絡、進捗管理等のプロジェクト内マネジメントを総括し、協力者やアドバイザー、領域全体との対話の窓口となる。プロジェクト全体での研究打合せは年2回行う。またキックオフ・報告シンポジウムをそれぞれ初年度と最終年度に行う(担当:友田)。最終年度には成果と政策提言を取り纏める(担当:落合)。また、アドバイザーとして、養育者支援制度に関して大日向雅美(恵泉女学園大学人間社会学部人間環境学科)、および、研究の学術面に関して山極寿一(京都大学)に助言を依頼する。

### ■グループA:養育者のメンタルヘルス問題に対する多分野横断的支援システム構築(黒田)

- ・グループリーダー:黒田公美(理化学研究所・脳科学総合研究センター)
- ・実施項目:A1 地域における多領域協働型子ども養育支援システム開発のための要点抽出(A1主担当 松宮)
  - A2 虐待刑事事件における養育者側要因の医学・社会学的調査(A2主担当 黒田)
  - A3 養育者支援プログラムの実装モデル事業(A3主担当 黒田)
- ・概要:子ども虐待の重大なリスク要因である、広義のメンタルヘルス問題を抱える養育者とその子どもへの支援を適切に提供するため、児童福祉と精神保健福祉・社会福祉の現場レベルでの協働体制を構築する。また虐待重症例については、司法精神医学・刑事司法との協働により、必要に応じ強制力のある診断・治療的介入制度を導入するための精神医学・脳科学的根拠を蓄積する。

### ■グループB:子側のリスク要因と愛着障害に関わる生物学的因子の解明(友田)

- ・グループリーダー:友田明美(福井大学子どものこころの発達研究センター)
- ・実施項目:B1 愛着障害の生物学的マーカー同定(B1主担当 友田)
  - B2 養育ストレスへのレジリエンスの神経基盤探索(B2主担当 友田)
  - B3 母子間相互作用のバイオマーカー探索(B3主担当 友田)
- ・概要:本グループは、被虐待児の臨床に加え、虐待を行ってしまう養育者(親)への支援・治療もあわせて予防・療育法を開発するための神経基盤・分子遺伝学的探索やエビデンス蓄積を行い、子育て困難(子ども虐待)を防止する養育者支援システムの社会実装に資する情報を提供する。

### ■グループC:子ども虐待の家庭環境・社会要因の国内及び国際比較研究(落合)

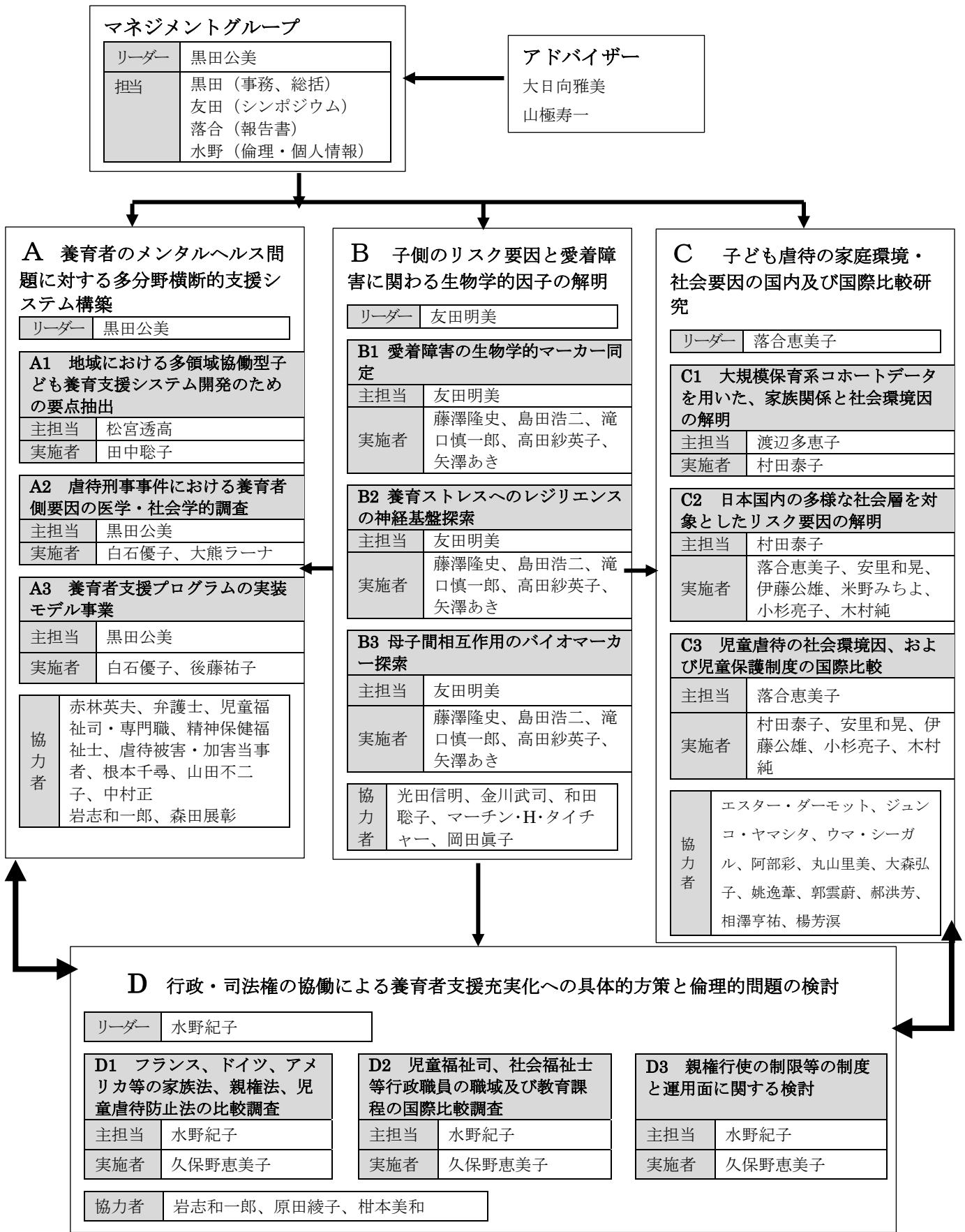
- ・グループリーダー:落合恵美子(京都大学大学院文学研究科)
- ・実施項目:C1 大規模保育系コホートデータを用いた、家族関係と社会環境因の解明(C1主担当 渡辺)
  - C2 日本国内の多様な社会層を対象としたリスク要因の解明(C2主担当 村田)
  - C3 児童虐待の社会環境因、および児童保護制度の国際比較(C3主担当 落)

合)

- ・**概要:** 子ども虐待の家庭・社会環境リスク要因として、養育者の家庭内不和やドメスティックバイオレンス(DV)、育児サポートの不足(孤育て)、経済的困窮、親族・近隣からの孤立(東京都福祉局、2005)等がこれまでの研究から明らかになっている。本研究グループは、国内及び諸外国における養育支援に関わる家庭内環境、及び社会制度的要因を探ることにより、今後の日本においてどのような公／私協働の養育者支援システムが有効なのかについての検討を行う。

#### ■グループD:行政・司法権の協働による養育者支援充実化への具体的方策と倫理的問題の検討(水野)

- ・**グループリーダー:**水野紀子(東北大学大学院法学研究科)
- ・**実施項目:**D1 フランス、イギリス・韓国等の家族法、親権法、児童虐待防止法の比較調査(D1主担当 水野)
  - D2 児童福祉司、社会福祉士等行政職員の職域及び教育課程の国際比較調査(D2主担当 水野)
  - D3 親権行使の制限等の制度と運用面に関する検討(D3主担当 水野)
- ・**概要:** 本グループは子ども虐待問題に関わる公的な「家族介入・支援」の障壁となっている日本の法・行政制度の課題を明らかにし、充実化への提言をまとめることを目的とする。このため、日本の家族法がモデルとしたフランス民法の制度を中心に国際比較調査を行い、さらに日本独自の事情を勘案して、現行制度の改善点を列挙・提言する。また養育者支援の実装において問題となる個人情報保護や倫理的な課題について、専門的見地から他のグループへの助言・協働を行う。



## 6. 研究開発実施者

研究グループ名：グループA

|   | 氏名   | フリガナ      | 所属                   | 役職<br>(身分) |
|---|------|-----------|----------------------|------------|
| ○ | 黒田公美 | クロダクミ     | 理化学研究所・脳科学総合研究センター   | チームリーダー    |
|   | 松宮透高 | マツミヤ ユキタカ | 県立広島大学保健福祉学部人間福祉学科   | 准教授        |
|   | 田中聡子 | タナカ サトコ   | 県立広島大学保健福祉学部人間福祉学科   | 教授         |
|   | 友田明美 | トモダ アケミ   | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 教授         |
|   | 水野紀子 | ミズノ ノリコ   | 東北大学大学院法学研究科         | 教授         |
|   | 白石優子 | シライシ ユウコ  | 早稲田大学大学院人間科学研究科      | D4         |

研究グループ名：グループB

|   | 氏名    | フリガナ        | 所属                   | 役職<br>(身分) |
|---|-------|-------------|----------------------|------------|
| ○ | 友田明美  | トモダ アケミ     | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 教授         |
|   | 藤澤隆史  | フジサワ タカシ    | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 特命助教       |
|   | 島田浩二  | シマダ コウジ     | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 特命助教       |
|   | 滝口慎一郎 | タキグチ シンイチロウ | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 病院助教       |
|   | 西川里織  | ニシカワ サオリ    | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 学術研究員      |
|   | 高田紗英子 | タカダサエコ      | 福井大学子どものこころの発達研究センター | 学術研究員      |
|   | 光田信明  | ミツタ ノブアキ    | 大阪府立母子保健総合医療センター     | 診療局長・主任部長  |
|   | 金川武司  | カナガワ タケシ    | 大阪府立母子保健総合医療センター     | 副部長        |

|  |      |        |                  |      |
|--|------|--------|------------------|------|
|  | 和田聡子 | ワダ サトコ | 大阪府立母子保健総合医療センター | 看護師長 |
|--|------|--------|------------------|------|

研究グループ名：グループC

|   | 氏名    | フリガナ     | 所属             | 役職<br>(身分) |
|---|-------|----------|----------------|------------|
|   | 落合恵美子 | オチアイ エミコ | 京都大学文学研究科      | 教授         |
| ○ | 伊藤公雄  | イトウキミオ   | 京都大学文学研究科      | 教授         |
|   | 安里和晃  | アサト ワコウ  | 京都大学文学研究科      | 准教授        |
|   | 渡辺多恵子 | ワタナベ タエコ | 日本保健医療大学保健医療学部 | 准教授        |
|   | 村田泰子  | ムラタヤスコ   | 関西学院大学社会学研究科   | 准教授        |
|   | 大淵裕美  | オオブチ ユミ  | 奈良女子大学         | 博士研究員      |

研究グループ名：グループD

|   | 氏名     | フリガナ    | 所属        | 役職<br>(身分) |
|---|--------|---------|-----------|------------|
| ○ | 水野紀子   | ミズノ ノリコ | 東北大学法学研究科 | 教授         |
|   | 久保野恵美子 | クボノエミコ  | 東北大学法学研究科 | 教授         |

## 7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 7-1. ワークショップ等

| 年月日       | 名称                                | 場所           | 参加人数 | 概要  |
|-----------|-----------------------------------|--------------|------|---|
| 2016/4/10 | 警察・検察、精神保健福祉と児童福祉連携による養育者支援の可能性   | JST サイエンスプラザ |      | A/D分科会。司法関係者や児童福祉関係者らからの話題提供、意見収集を行った。                                |
| 2016/6/6  | 警察・検察、精神保健福祉と児童福祉連携による養育者支援 東京連絡会 | JST サイエンスプラザ |      | A/D分科会(4/10)での意見を参考に、さらに具体的な連携の流れ、役割分担などを話し合うため、東京近郊にエリアの関係者を集め、議論した。 |



|              |  |             |     |  |
|--------------|--|-------------|-----|--|
| 2016/9/3     | 福井大学公開講座「子育てと養育環境一次世代を担う子どもたちの健全な発達を支えるための子育て支援一 | 福井大学        |     | 一般を対象とした公開シンポジウムとして、産婦人科医からの提言や県内における子育て支援を取り巻く包括的支援システムについて解説した。                                    |
| 2016/9/19-22 | フランス現地調査およびシンポジウム                                | パリ          |     | グループCの保健系・社会学系とグループDと合同で、フランスの児童保護機関（NPO含む）の実態調査を実施。また仏英の共同研究者および仏の行政担当者・NPOのソーシャルワーカーらと合同でシンポジウム開催。 |
| 2016/12/3    | 養育者プログラム実践者ミーティング                                | 理研東京連絡事務所   |     | 養育者支援プログラムの実践者（5団体）と検察庁、児関係者を集め、プログラム導入のための配慮や工夫、普及に向けた取り組みについて議論をした。                                |
| 2017/1/7     | 公開シンポジウム「公私連携による養育者支援プログラムの活用」                   | 筑波大学東京キャンパス |     | 第1部では、養育者支援プログラムの実践者がプログラムを紹介し、第二部ではプログラムのより良い提供のために、公私連携をどのように行っていくのかをパネルディスカッションで議論した。             |
| 2017/3/5     | 公開シンポジウム「根拠に基づくチームワーク実践のコツとツボ」                   | 筑波大学東京キャンパス | 60名 | 長時間保育やインクルーシブ保育、根拠に基づく保育の理解促進を目的として開催。根拠に基づく実践の具体例を実践の場の専門職を中心に紹介し、参加者とのディスカッションを行なった。               |
| 2017/3/7     | ブリストル現地調査およびセミナー                                 | ブリストル       |     | グループCの社会学系メンバーがイギリスの児童保護機関（NPO含む）の実態調査を実施。また英の共同研究者、ならびにブリストル大学のソーシャルワーク研究者と合同でセミナー開催。               |

## 7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

※以下、各項目グループ順で記載した。

### (1) 書籍、DVD

- ・黒田公美 「親子のつながりを作る脳」 in 『つながる脳科学』、講談社、p281-313、2016.11
- ・友田明美 「児童虐待の脳への影響」 in 『体と心 保健総合大百科 小学館編 2016年版』少年写真新聞社、p98-100、2016.4
- ・友田明美 「自閉スペクトラム症」 in 『子どもの神経疾患の診かた』（新島順一、山本仁、山内秀雄 編）、医学書院、p164-168、2016.5
- ・藤澤隆史 「心的外傷後ストレス障害（PTSD）－癒しがたい心の傷」 in 『絶対役立つ臨床心理学：カウンセラーを目指さないあなたにも』（藤田哲也監修、串崎真志 編著）、ミネルヴァ書房、p81-95、2016.9
- ・友田明美 「虐待・体罰と脳」 in 『新版 自閉スペクトラム症の医療・療育・教育』（金生由紀子、渡辺慶一郎、土橋圭子 編）、金芳堂、p277-286、2016.12
- ・滝口慎一郎 「被虐待児症候群」 in 『今日の治療指針 2017年版 私はこう治療している』（福井次矢、高木誠、小室一成 編）、医学書院、p1415-1416、2017.1
- ・友田明美 「児童虐待による脳への影響」 in 『子ども虐待の予防とケアのすべて』（子ども虐待の予防とケア研究会編）、第一法規、p270-279、2017.3
- ・松浦賢長、笠井直美、渡辺多恵子編、保健の実践科学シリーズ 学校看護学、講談社、全240頁、2017.3.
- ・安里和晃 「第九章 台湾における外国人労働者政策と高齢者介護政策—国境を越えるケアの制度的整合性」 in 『子どもを産む・家族をつくる人類学オルタナティブへの誘い』（安里和晃、松岡悦子編）、勉誠出版、p240-268、2017.2
- ・水野紀子 「家族の法と個人の保護」 in 『福祉+a⑨ 正義』（後藤玲子編）、ミネルヴァ書房、p35-48、2016.4.

### (2) ウェブサイト構築

- ・「養育者支援によって子どもの虐待を低減するシステムの構築」 <http://parent-supporters.brain.riken.jp/index.html>

### (3) 学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・黒田公美、理化学研究所 脳科学本気講座「愛と憎しみの脳科学 一人間の親密性と攻撃性を神経科学から考える」、2016.4、埼玉県和光市
- ・黒田公美、三鷹市民大学「社会で子育て」、2016.6.10、三鷹市
- ・黒田公美、チャイルドラインおかもま公開講座「親子間愛着の脳神経機構とその問題」、2016.9.11、岡山市
- ・黒田公美、Academic babywearing conference 2016「ほ乳類にとっての抱っことおんぶ：親子双方の利益」、2016.10.30、東京大学
- ・黒田公美、埼玉県社会福祉士公開研修「子育てを脳科学する」、2017.2.18、さいたま市
- ・黒田公美、静岡県助産師会保健指導部研修会「哺乳類の親子関係と輸送反応」、2017.3.4、静岡市

- ・友田明美、加古川市小児科医会総会「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.4.23、加古川市
- ・滝口慎一郎、明日の発達障害臨床を考える会「客観的検査によるADHD薬物療法の評価」、2016.5.18、福井市
- ・友田明美、大分北部小児科医会総会「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.5.20、大分市
- ・友田明美、子ども虐待防止ネットワークみやぎ・宮城県アディクション問題研究会講演会「子育て支援の意義を確認する～児童虐待といやされない傷～」、2016.5.21、仙台市
- ・友田明美、ホームカミングデー2016 in文京「子育て支援の意義を確認する～児童虐待といやされない傷～」、2016.5.28、福井大学
- ・友田明美、第12回日本自閉症スペクトラム学会資格認定講座「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.5.29、福井市
- ・滝口慎一郎、第25回中部ブロック児童養護施設・乳児院研究協議会「福井大会」「アタッチメントと被虐待児のトラウマに対する理解について」、2016.6.2、あわら市
- ・滝口慎一郎、福井市中部民生児童委員協議会研修会「発達障害と子ども虐待の理解と支援」、2016.6.13、福井市
- ・友田明美、平成28年度東京都福祉保健局 児童虐待対応研修専門講座「児童虐待による脳への傷と回復へのアプローチ」、2016.6.17、東京都
- ・友田明美、第10回千葉子どものこころの医療研究会「報酬系からADHDや愛着障害の脳を科学する」、2016.6.17、千葉市
- ・友田明美、滋賀県臨床心理士会研修会「子育て支援の意義を確認する～児童虐待といやされない傷～」、2016.6.18、大津市
- ・滝口慎一郎、社会的養護研究市民セミナー「虐待を受けた子どもの理解と対応」、2016.6.29、越前市
- ・高田紗英子、社会的養護研究市民セミナー「対人支援職のメンタルヘルスケア」2016.6.29、越前市
- ・滝口慎一郎、平成28年度近畿地区里親研修会「虐待と脳科学」2016.7.3、大阪市
- ・滝口慎一郎、発達障害研修会「客観的検査によるADHD薬物療法の評価」、2016.7.12、福井市
- ・友田明美、長崎大学大学院セミナー「不適切な養育と子どもの依存」、2016.7.15、長崎市
- ・友田明美、日本小児神経学会北陸地方会夏季セミナー「発達障害や愛着障害の脳科学研究」、2016.7.17、あわら市
- ・友田明美、日本教育大学協会養護教諭部会・全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会第51回研究協議会総会「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.8.10、福井市
- ・友田明美、高松発達障害を考える会「報酬系からADHDや愛着障害の脳を科学する」、2016.8.27、高松市
- ・友田明美、第26回日本外来小児科学会年次集会「報酬系からADHDや愛着障害の脳を科学する」、2016.8.28、高松市
- ・友田明美、IPU次世代教育への招待- 脳科学と発達心理学の視点から考える教育学入

門講座 – 「子どもの心の発達と虐待 ～ストレスや虐待からの回復～」、

2016.8.28、岡山市

- ・友田明美、ADHD講演会「注意欠如多動症（ADHD）の理解とケア」、2016.8.29、東京都
- ・友田明美、平成28年度福井大学公開講座（シンポジウム）「子育て支援の意義を確認する～愛着障害の脳科学研究～」、2016.9.3、福井市
- ・友田明美、平成28年度佐賀県助産師会研修会「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.9.10、佐賀市
- ・高田紗英子、兵庫県こころのケアセンター こころのケア特別研修「子どものトラウマへの根拠に基づく治療～TF-CBT概論～」、2016.9.23～24、神戸市
- ・友田明美、グローバルサイエンスキャンパス事業におけるインテンシブコース女性研究者講義「こころの科学福井大学生命科学複合研究教育センター企画公開講座」、2016.9.24、福井大学
- ・榊原信子、平成28年度公益社団法人日本助産師会「気がかりな親子を地域でどう支えていくか—地域保健センターの実践から—」、2016.9.26、福井市
- ・友田明美、脳科学と少年司法 研究会「脳科学・神経科学と少年非行～少年の脳の発達に関する脳科学・神経科学の知見～」、2016.10.1、東京都
- ・友田明美、鹿児島子どもこころの医療講演会「報酬系からADHDや愛着障害の脳を科学する」、2016.10.15、鹿児島県
- ・友田明美、町田市医師会講演会「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.10.21、東京都
- ・友田明美、公益社団法人発達協会セミナー：発達障害の医学と保育・教育—診断の概念と生育環境からの理解「発達障害のある子と愛着形成障害の脳科学」、2016.10.22、東京都
- ・友田明美、東海大学医学部八王子病院 児童虐待啓発講演会「子どものこころの発達を見守る～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」、2016.10.22、八王子市
- ・友田明美、自閉スペクトラム症学術講演会「ASDを含む神経発達障害の包括的理解：生物学的指標（発達的中間表現型）の視点から」、2016.10.23、東京都
- ・友田明美、第58回東京矯正管区管内篤志面接委員研究協議会「脳科学・神経科学と少年非行～少年の脳の発達に関する脳科学・神経科学の知見～」、2016.11.1、さいたま市
- ・友田明美、厚生労働省・平成28年度子どもの虐待防止推進全国フォーラム in ふくい「虐待の子どもへの影響～医療的観点から～」、2016.11.19、福井市
- ・友田明美、第184回メンタルケア・スペシャリスト養成講座「子どものこころと脳」、2016.11.27、福井市
- ・滝口慎一郎、今立小中連携教育研究会「子どもの脳の発達と睡眠：脳科学から考える眠りの生活習慣」、2016.11.29、越前市
- ・友田明美、第37回和漢医薬学総合研究所特別セミナー『こころの発達と障害—その理解と予防治療に向けた研究最前線』「愛着障害の脳科学：子どものこころの発達と支援」、2016.12.2、富山市
- ・友田明美、富山県医師会：児童虐待防止研修会「子ども虐待と脳科学：子どものこ

- ころの発達と支援」、2016.12.2、富山市
- ・友田明美、一般財団法人ワンネスグループ セレニティパークジャパン名古屋フォーラム「依存症 ト라우マ 回復」、2016.12.3、名古屋市
  - ・高田紗英子、NPO法人女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ「DV被害者へのよりよい支援に向けて」、DV支援者養成講座、2016.12.8、神戸市
  - ・友田明美、自民党政務調査会『虐待等に関する特命委員会』「児童虐待・ネグレクトに起因する愛着障害の脳科学研究」、2016.12.9、東京都
  - ・西里美菜保、大野市生涯学習課家庭教育講座「子どもを伸ばすほめ方・叱り方」、2016.12.21、大野市
  - ・友田明美、浜松医科大学 精神医学講座・児童青年期精神医学講座合同連続講座「児童虐待に起因する愛着形成障害と発達障害の類似と相違：神経生物学的知見」、2017.1.8、浜松市
  - ・友田明美、日本産婦人科医会妊産婦メンタルヘルスケアプロジェクト講演会「周産期から見つめ直す児童虐待：アタッチメント障害の脳科学」、2017.1.9、東京都
  - ・友田明美、坂井地区校長会 第3回学校運営研究大会・研修会「学校現場での発達障がい理解とケア」、2017.1.13、坂井市
  - ・友田明美、平成28年度 子どもの虹情報研修センター公開講座「子ども虐待と脳科学」、2017.1.17、横浜市
  - ・西里美奈保、榊原信子、大野市家庭教育学級「子どもの行動を理解しよう」、2017.2.5、大野市
  - ・友田明美、日本周産期・新生児医学会学術集会 第35回周産期学シンポジウム「周産期から見つめ直す児童虐待—愛着形成障害の視点から」、2017.2.10、大阪市
  - ・友田明美、第3回ACE研究会「児童虐待・ネグレクトに起因する愛着障害の脳科学研究」、2017.2.23、あわら市
  - ・友田明美、日本精神衛生会フォーラム：メンタルヘルスの集い「子ども虐待と脳科学」、2017.3.4、東京都
  - ・友田明美、横浜市緑区こども家庭支援課講演会「子ども虐待と脳科学—アタッチメント（愛着）の視点から—」、2017.3.6、横浜市
  - ・友田明美、西日本小児内分泌研究会「子ども虐待と脳科学：愛着形成障害の視点から」、2017.3.11、福岡市
  - ・友田明美、徳島県保健福祉政策課主催 保健所技術職員研修会「トラウマによる脳への傷と回復へのアプローチ～脳の最新研究から～」、2017.3.17、徳島市
  - ・友田明美、第31回日本助産学会学術集会「脳と虐待 —児童虐待による脳への傷と回復への支援」、2017.3.18、徳島市
  - ・友田明美、京都精神疾患クリニカルフォーラム「発達障害とマルトリートメントに起因する愛着形成障害との類似と相違：神経生物学的知見から治療戦略まで」、2017.3.28、京都市
  - ・Tanaka E, Watanabe T, Watanabe K, Anme T. 児童発達・教育交流会 “The Collaboration Between Comprehensive Childcare and Science : Using the Cloud Computing-Based Support System and Longitudinal Cohort Study. 2017.1.5.成都大学（中国）
  - ・安里和晃、「超高齢社会をどう支えるか—アジア諸国の試行錯誤」、「セミナー—少子高

齢化への対応策を考える」(招聘)、2016.5.21、大阪薬科大学

- ・米野みちよ、「離婚と子供の処遇に関する比較研究—中国・日本・韓国・フィリピンニオケル交流と扶養をめぐる紛争」国際研究集会ゲストスピーカー「日比婚・日比児の実情と課題」(創価大学・南方研究室)、2016.4.23、
- ・Murata Yasuko and Yang Fangming, “Effective carer support systems to reduce child maltreatment in Japan” Child Protection and Childcare Support Seminar at School of Sociology, Politics and International Studies, Bristol University, Bristol, UK, March 7, 2017.

### 7-3. 論文発表

※以下、各項目グループ順で記載した。

#### (1) 査読付き (19件)

##### ●国内誌 (5件)

- ・松宮透高「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯支援における包括型地域生活支援 (ACT) プログラムの活用の可能性とその課題」 in 『子どもの虐待とネグレクト』、18(3) .p353-361、2016.12
- ・落合恵美子「フランス福祉国家の変容と子どものケア—「アジア化するヨーロッパ仮説の検討」」 in 『京都社会学年報』第24号、p17-55、2016.12
- ・大森弘子「高い育児不安を抱える家庭における就労と子育て支援」 in 『家庭教育研究』第21号、p25-36、2016.3
- ・水野紀子「子育てと家族と法」 in 『ケース研究』326号、p81-122、2016.6
- ・水野紀子「下夷美幸著『養育費政策の源流』」 in 『大原社会問題研究所雑誌』695・696号、p83-86、2016.9
- ・水野紀子「多様化する家族と法的課題：日本」 in 『日仏文化』86号、p114-125、2017.3

##### ●国際誌 (14件)

- ・Fujioka T, Takiguchi S, Yatsuga C, Hiratani M, Hon K, Min-Sup S, Cho S, Kosaka H, Tomoda A\*. Advanced test of attention in children with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder in Japan for evaluation of methylphenidate and atomoxetine effects. *Clin Psychopharmacology Neurosci*, 14(1):79-87, 2016.
- ・Kumazaki H\*, Muramatsu T, Fujisawa TX, Miyao M, Matsuura E, Okada K, Kosaka H, Tomoda A, Mimura M. Assessment of olfactory detection thresholds in children with autism spectrum disorders using a pulse ejection system. *Mol Autism*, Jan 19;7:6, 2016.
- ・Fujioka T, Inohara K, Okamoto Y, Masuya Y, Ishitobi M, Saito DN, Jung M, Arai S, Matsumura Y, Fujisawa TX, Narita K, Suzuki K, Tsuchiya JK, Mori N, Katayama T, Sato M, Munesue T, Okazawa H, Tomoda A, Wada Y, Kosaka H\*. Gazefinder as a clinical supplementary tool for discriminating between autism spectrum disorder and typical development in male adolescents and adults. *Mol*

- Autism, Mar 23;7:19, 2016.
- Fujisawa TX\*, Azuma Y, Konishi M, Miyamoto N, Nagata N. Age-related bias in age estimation based on facial images of others. *Psychology*, Apr 7;7(4):459-468, 2016.
  - Kosaka H, Okamoto Y, Munosue T, Yamasue H, Inohara K, Fujioka T, Anme T, Orisaka M, Ishitobi M, Jung M, Fujisawa TX, Tanaka S, Arai S, Asano M, Saito DN, Sadato N, Tomoda A, Omori M, Sato M, Okazawa H, Higashida H, Wada Y. Oxytocin efficacy is modulated by dosage and oxytocin receptor genotype in young adults with high-functioning autism: a 24-week randomized clinical trial. *Transl Psychiatry*, Aug 23;6(8), e872, 2016.
  - Mizuno K\*, Kawatani J, Tajima K, Sasaki A, Yoneda T, Komi M, Hirai T, Tomoda A, Joudoi T, Watanabe Y. Low putamen activity associated with low reward sensitivity in childhood chronic fatigue syndrome. *Neuroimage Clin*, 12:600–606, 2016.
  - Komeda H, Osanai H, Yanaoka K, Okamoto Y, Fujioka T, Arai S, Inohara K, Koyasu M, Kusumi T, Takiguchi S, Kawatani M, Kumazaki H, Hiratani M, Tomoda A, Kosaka H. Decision making processes based on social conventional rules in early adolescents with and without autism spectrum disorders. *Scientific Reports*, 6:37875,2016.
  - Fujisawa TX, Nishitani S, Iwanaga R, Matsuzaki J, Kawasaki C, Tochigi M, Sasaki T, Kato N, Shinohara K\*. Association of aryl hydrocarbon receptor-related gene variants with the severity of autism spectrum disorders. *Frontiers in Psychiatry*, 7, 184, 2016.
  - Nishikawa S, Sundbom E, Zashikhina A, Lekkou A, & Hägglöf B. Differences and similarities of mental health problems reported by adolescents from Greece, Japan, Russia, and Sweden. *Psychology*, 7:1658-1670,2016
  - Ichikawa H, Mikami K, Okada T, Yamashita Y, Ishizaki Y, Tomoda A, Ono H, Usuki C, Tadori Y. Aripiprazole in the treatment of irritability in children and adolescents with autism spectrum disorder in Japan: A randomized, double-blind, placebo-controlled study. *Child Psychiatry Hum Dev*, Dec 21, 2016.
  - Naruse H, Fujisawa TX, Yatsuga C, Kubota M, Matsuo H, Takiguchi S, Shimada S, Imai Y, Hiratani M, Kosaka H, Tomoda A\*. Increased anterior pelvic angle characterizes the gait of children with attention deficit/hyperactivity disorder. *PLoS One*, Jan 18;12(1):e0170096, 2017.
  - Nishizato M, Fujisawa TX, Kosaka H, Tomoda A\*. Developmental changes in social attention and oxytocin levels in infants and children. *Scientific Reports*, in press, 2017.
  - Tokie Anme, Emiko Tanaka, Taeko Watanabe, Etsuko Tomisaki, Yukiko Mochizuki. Does Center-based Childcare Play a Role in Preventing Child Maltreatment? Evidence from a One-year Follow-up Study. *International Journal of Applied Psychology*. 6(2). 31-36. 2016.
  - Wencan Chen, Emiko Tanaka, Kumi Watanabe, Etuko Tomisaki, Taeko

Watanabe, Bailiang Wu, Tokie Anme. The influence of home-rearing environment on children's behavioral problems 3 years' later. *Psychiatry Research*. 244. 185–193. 2016.

(2) 査読なし (18件)

- ・黒田公美、白石優子、篠塚一貴、時田賢一 「子ども虐待はなぜ起こるのか—親子関係の脳科学」 in 『ここまでわかった！脳とこころ（こころの科学増刊号）』日本評論社、p16-24、2016.7
- ・松宮透高「子ども虐待防止に活かすべき精神保健福祉士の機能とその課題—メンタルヘルス問題のある親への生活・子育て支援を考える」 in 『精神保健福祉』、47(2)、p 96-99、2016.7
- ・松宮透高「精神疾患のある親による子育て世帯支援における社会福祉の役割」 in 『社会福祉研究』、(125)、p84-90、2016.4
- ・島田浩二、滝口慎一郎、藤澤隆史、友田明美 「子ども虐待の脳科学研究」 in 『小児内科 48巻2号』東京医学者、p149-153、2016.2
- ・友田明美 「児童虐待と傷つく脳—学校は児童虐待にどう対応すればよいか—」 in 『日本健康相談活動学会誌 11巻1号』日本健康相談活動学会、p3-4、2016.4
- ・友田明美 「子育て困難を支援する“愛着障害の診断法と治療薬”の開発～発達障害や愛着障害の脳科学研究～」 in 『薬学雑誌 136巻5号』日本薬学会、p711-714、2016.5
- ・友田明美 「乳幼児期の被虐待体験とその後の精神発達への影響—反応性アタッチメント障害と発達性トラウマ障害—」 in 『精神科治療学 31巻7号』星和書店、p865-871、2016.7
- ・友田明美 「子育て支援の意義を確認する～児童虐待といやされない傷～」 in 『乳幼児精神保健学会誌 2016年第9号』乳幼児精神保健学会誌、p10-17、2016.9
- ・友田明美 「子ども虐待と脳科学 前編：虐待と脳の関連」 in 『子育て支援と心理臨床 vol12: 9月号』福村出版、p94-97、2016.9
- ・友田明美 「小児の虐待—脳科学的な解析から—」 in 『小児科臨床』日本小児医事出版社、第69巻第10号、p1613-1622、2016.10
- ・友田明美 「不適切な養育と子どもの依存」 in 『日本小児禁煙研究会雑誌』日本小児禁煙研究会、6巻2号、p3-9、2016.10
- ・友田明美 「被虐待者の脳科学研究」 in 『児童青年精神医学会誌（特集・「子ども虐待とケア」）』児童青年精神医学会、57巻5号、p31-37、2016.11
- ・友田明美 「いま、子どもの心の育ちを考える～被虐待児、発達障がい児の脳科学～」 in 『子どものからだと心白書』57巻5号、p31-37、2016.12
- ・友田明美 「児童虐待に起因する愛着形成障害の脳科学的知見」 in 『精神神経学雑誌』、公益社団法人 日本精神神経学会、117巻11号、p928-935、2016.12
- ・高田紗英子 「PTSDに対する認知行動療法の神経生理学的基盤に関する文献研究」 in 『心的トラウマ研究』ひょうご震災記念21世紀研究機構兵庫県こころのケアセンター研究部、第12号、p41-49、2017.11
- ・大森弘子（共著）「社会的養護を必要とする母子世帯へ子育て支援が与える影響—シングルマザーの現状と育児不安について—」 in 『佛教大学社会福祉学論集』、第12号、p17-25、2016.3



- ・村田泰子「家族政策と社会階層（前編）—イギリス Infant Feeding Survey にみる、授乳期家族に関する知識とその活用」in『関西学院大学紀要』、第 126 号、p21-36、2017.3

#### 7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

※以下、各項目グループ順で記載した。

##### (1) 招待講演（国内会議21件、国際会議2件）

- ・黒田公美、大会企画シンポジウム「なぜ、人間の子育てに共同保育が必要なのか」、日本子ども虐待防止学会、大阪、2017.11.25
- ・黒田公美、「子育て行動の脳内機構」、京都大学霊長類研究所ホミニゼーション研究会、犬山市、2017.3.24
- ・松宮透高、「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯への先駆的支援活動例を通して考える児童家庭支援センターのチームマネジメント機能」、全国児童家庭支援センター協議会実務者研修会、逗子市、2016.7.12
- ・松宮透高、「メンタルヘルス問題のある親による子ども虐待—その実態と支援上の諸課題—」、児童福祉法研究会、関西学院大学、2016.7.30
- ・松宮透高、「苦勞する権利と苦勞を語る権利—メンタルヘルス問題があり子育てをしている親のリカバリーを考える」、リカバリーフォーラム 2016 権利擁護とリカバリー（シンポジスト）、東京都、2016.8.27
- ・松宮透高、「メンタルヘルス問題のある親による子ども虐待—その実態と支援体制整備の課題—」、三重県児童相談所・市町村児童福祉担当職員研修会、津市、2016.9.9
- ・松宮透高、「要保護児童対策地域協議会の機能強化に向けた課題—チームマネジメントとメンタルヘルス・リテラシーに関する調査結果から」、岡山県要保護児童対策地域ネットワーク研修会、岡山市、2016.10.12
- ・松宮透高、「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯への支援を考える」、児童虐待防止全国ネットワーク 第25回シンポジウム(基調講演・コーディネーター)、東京都、2017.1.22
- ・Tomoda A (Invited speaker). Neural foundations of variability in attachment: Reward systems and/or visual cortex abnormalities in reactive attachment disorder. Ernst Strüngmann Forum on Contextualizing Attachment: The Cultural Nature of Attachment (シンポジウム) Ernst Strüngmann Forum Contextualizing Attachment (シンポジウム) 2016 Frankfurt am Main, Germany, 2016.4.7
- ・友田明美、「不適切な養育と子どもの依存」、第15回日本トラウマティック・ストレス学会仙台大会『児童期のトラウマと物質乱用』、仙台市、2016.5.21
- ・高田紗英子、「子どものトラウマのアセスメントと治療—TF-CBT概論—、UPIDの実施手順について」、第15回日本トラウマティック・ストレス学会プレコングレス、仙台市、2016.5.19
- ・友田明美、「児童虐待に起因する愛着形成障害の脳科学的知見」、第111回日本精神神経学会学術総会、『精神科医は、増え続ける児童虐待にどう関わるか—脳科学・児童相談所医師他からの現状報告とメッセージ—』、千葉市、2016.6.3
- ・友田明美、「報酬系からADHDや愛着障害の脳を科学する」、第26回日本外来小児科学会年次集会、高松市、2016.8.28

- ・友田明美、「ADHDと愛着障害」、第57回日本児童青年精神医学会総会「ADHDの併存症の診断と治療」、岡山市、2016.10.27
- ・友田明美、「脳科学・神経科学と少年非行～少年の脳の発達に関する脳科学・神経科学の知見～」、第43回日本犯罪社会学会『脳科学と少年司法』、神戸市、2016.10.29
- ・友田明美、「児童虐待に起因する愛着形成障害と発達障害の類似と相違：脳科学的知見」、第20回日本精神保健・予防学会学術集会 特別シンポジウム『アットリスク精神状態ARMSと発達障害の類似と相違』、東京都、2016.11.13
- ・友田明美、「児童虐待に起因する愛着障害の脳科学研究」、JaSPCANおおさか大会、大阪市、2016.11.26
- ・友田明美、「周産期から見つめ直す児童虐待 愛着形成障害の視点から」、日本周産期・新生児医学会 第35回周産期学シンポジウム、大阪市、2017.2.10
- ・友田明美、「次世代を担う子どもたちのために今できること」、子どもみんなシンポジウム2017大阪『子どもたちの未来を創る～科学的アプローチの可能性～』、大阪市、2017.2.25
- ・友田明美、「児童虐待に起因するアタッチメント障害と発達障がいとの類似と相違：脳科学的知見」、日本ADHD学会『発達障がいの理解のために -脳科学研究を中心に-』、横浜市、2017.3.5
- ・渡辺多恵子、根拠に基づく保育の質向上：WEBを用いた展開可能性、日本保育学会、東京、2016.5.7.
- ・大森弘子、「子ども・子育て家庭の現状」/「子ども家庭福祉」、『平成28年度 京都府子育て支援員研修』、京都府保育協会、京都、2016.7.12.
- ・Asato Wako, Welfare Regime in Asia: Diversity in Similarity, The 2016 Annual Conference of Social Welfare Association of Taiwan Transformation of Welfare System in Aging Society: Governance, Political Party and Citizen Movement, invited speaker, Chaiyi, Taiwan, May 14, 2016.

## (2) 口頭発表 (国内会議15件、国際会議14件)

- ・松宮透高・田中聡子・西村いづみ・八重樫牧子、「メンタルヘルス問題のある親に対する保育士の対応機能と研修ニーズ」、日本子ども虐待防止学会、大阪市、2016.11.26
- ・田中聡子・松宮透高・西村いづみ・八重樫牧子、「民間支援機関を活用した要保護児童地域対策協議会の実効化」、日本子ども虐待防止学会、大阪市、2016.11.26
- ・松宮透高・田中聡子、「要保護児童対策地域協議会の機能強化に向けた課題(2)―チームマネジメントおよびメンタルヘルス・リテラシーの問題点とその要因―」、日本社会福祉学会、京都市、2016.9.11
- ・田中聡子・松宮透高、「要保護児童対策地域協議会の機能強化に向けた課題(1)―調査機関における機能不全とその要因―」、日本社会福祉学会、京都市、2016.9.11
- ・MATSUMIYA Yukitaka. “Supporting the Abusing Parents with Mental Disease: Good Practices in Japan” Conference on “Changing Care Diamonds in Europe and Asia” EHESS 2016. 9.22
- ・Takiguchi S, Fujisawa TX, Mizushima S, Saito DN, Shimada K, Okamoto Y, Nishikawa S, Takada S, Mizuno Y, Kosaka H, Tomoda A The neural effects of

- intranasal oxytocin administration in reactive attachment disorder. 第58回日本小児神経学会学術総会、東京都、2016.6.3
- ・友田明美、「アイトラッカーを用いた社会発達メカニズムの解明」、第58回日本小児神経学会学術総会『発達の視点から見る脳機能 ～脳機能イメージングを用いた検討～』、東京都、2016.6.4
  - ・Mizuno K, Joudoi T, Tomoda A, Watanabe Y. Neural bases of decrease in reward sensitivity in pediatric AD/HD, RAD and CFS.第58回日本小児神経学会学術総会（一般・口演）、東京都、2016.6.4
  - ・友田明美、「神経発達障害の包括的理解のために：生物学的指標（発達の中間表現型）という視点」、第58回日本小児神経学会学術総会、東京都、2016.6.5
  - ・友田明美、「発達障害や愛着障害の脳科学研究」、『新アタッチメント理論 創生に向けた研究会』、加賀市、2016.7.5
  - ・滝口慎一郎、藤澤隆史、島田浩二、水島栄、齋藤大輔、岡本悠子、小坂浩隆、友田明美、「反応性愛着障害における報酬機能不全」、第8回日本子ども虐待医学会学術集会、福岡市、2016.7.23
  - ・西里美菜保、藤澤隆史、友田明美、「母親のメンタルヘルスが子の社会的情報への注視時間に及ぼす影響」、第57回 日本児童青年精神医学会総会、岡山市、2016.10.28
  - ・藤岡 徹、新井清義、藤澤隆史、土屋賢治、片山泰一、友田明美、平谷美智夫、小坂浩隆、「自閉スペクトラム症児の適応能力と社会的情報への注視時間の関連性」、第57回日本児童青年精神医学会総会、岡山市、2016.10.28
  - ・小泉径子、松村由紀子、石川俊介、升谷泰裕、岡崎玲子、岡本悠子、藤岡徹、滝口慎一郎、友田明美、小坂浩隆、「オキシトシン単回投与が非協力者の魅力度評価に与える影響」、第57 回日本児童青年精神医学会総会、岡山市、2016.10.28
  - ・友田明美、「児童虐待に起因する愛着障害の脳科学研究」、2016年度 医療心理懇話会、東京都、2016.11.2
  - ・Mizuno Y, Jung M, Fujisawa TX, Shimada K, Takiguchi S, Saito D, Kosaka H, Tomoda A. The regional neural function and functional integration of the cerebellum in children with ADHD: A resting-state fMRI study. The 8th International Neuroscience and Biological Psychiatry Regional “Stress and Behavior” Conference . 横浜市、2016.7.25
  - ・Tomoda A. Neural basis of reactive attachment disorder: A functional and volumetric MRI Study. 「小児期愛着形成障害に起因する発達障がいシナプス分子病態と治療」、第38回日本生物学的精神医学会・日本神経化学会大会合同年会、福岡市、2016.9.9
  - ・Tomoda A. A difference in impaired neural reward processing in children with ADHD and children with reactive attachment disorder. The 22nd International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (IACAPAP) World Congress and the 36th CACAP Conference (第22回国際児童青年精神医学会議および第36回カナダ児童青年精神医学会議) Symposium: “Structural and functional imaging studies in far east Asian children and adolescents with ADHD” (シンポジウム) 2016.9.21 Calgary, Canada
  - ・Koizumi M, Matsumura Y, Ishikawa S, Matsumoto H, Masuya Y, Okazaki R,

- Okamoto Y, Fujioka T, Takiguchi S, Tomoda A, Kosaka H The effect of oxytocin on detection of altruistic person for children. The 22nd International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (IACAPAP) World Congress and the 36th CACAP Conference 2016.9.22 Calgary, Canada
- OCHIAI Emiko 2016 “Childcare and Child Protection Diamonds in France: Is Europe becoming like Asia?” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - MIZUNO Noriko 2016 “Family and Law Caring for Children: Child Abuse and Childcare Support” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - Esther DERMOTT 2016 “Poverty, parenting, child abuse and neglect: evidence and support mechanisms” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - MURATA Yasuko 2016 “Breastfeeding, motherhood and social class in Japan” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - ASATO Wako 2016 “International Mobility of Children and Its Challenges: Cases from Filipino residents in Japan” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - TANAKA Emiko, WATANABE Kumi, ANME Tokie 2016 “Bridge Between Practice and Science Using WEB: Evidence based Empowerment by Cohort Study” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - ONDA Yoko 2016 “Child and Adolescent Psychiatric Situation in Japan: From a Psychiatric Hospital in Tokyo” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - ITO Kimio 2016 “Masculinization of “Deprivation”; Japanese Post-war Family-gender Policies and Men” Changing Care Diamonds in Europe and Asia: Asianization of Europe and Europeanization of Asia? Part 1. Childcare and Child Protection at EHESS, Paris.
  - Asato Wako, “Neo-Plural Society from the Perspectives of Intersection between Migration and Welfare Regime: Cases from Gulf Countries”, 日本国際政治学会, 幕張メッセ, October 15, 2016.
  - Asato Wako, “Japanese-Filipino Children and Trafficking”, CHILDREN ON THE MOVE: MIGRANT CHILDREN AND YOUTH IN ASIA, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 10th June 2016.

(3) **ポスター発表** (国内会議2件、国際会議1件)

- ・川谷正男、巨田元礼、米谷 博、滝口慎一郎、大嶋勇成、友田明美、平谷美智夫、  
「発達性ディスレクシアの同胞例における臨床的多様性」、第58回日本小児神経学会  
学術総会、東京都、2016.6.3
- ・水野賀史、丁ミンヨン、藤澤隆史、滝口慎一郎、島田浩二、齋藤大輔、小坂浩隆、友  
田明美、「ADHD児における安静時の小脳の脳活動」、第58回日本小児神経学会学術  
集会、東京都、2016.6.3
- ・Mizuno Y, Jung M, Fujisawa TX, Takiguchi S, Shimada K, Saito DN, Kosaka H,  
Tomoda A. The Abnormal Regional Neural Function and Functional Integration of  
the Cerebellum in Children and Adolescents with Attention-Deficit/Hyperactivity  
Disorder. 63rd Annual Meeting of American Academy of Child and Adolescent  
Psychiatry 2016.10.24 New York City, USA

**7-5. 新聞報道・投稿、受賞等**

(1) **新聞報道・投稿** (4件)

- ・黒田公美、「経営ひとこと」日刊工業新聞、2016.5.5,
- ・黒田公美、「かがくアゴラ」日本経済新聞、2016.7.24
- ・友田明美、「子どもたちの体と心や脳の発達にどういった影響を及ぼしているのか」し  
んぶん赤旗、2016.11.16
- ・友田明美、「子どもの時に受けた虐待が脳の発育に与える影響」朝日新聞、  
2016.11.27

(2) **受賞** (2件)

- ・第58回日本小児神経学会学術集会最優秀English Session賞  
Mizuno K, Joudoi T, Tomoda A, Watanabe Y. Neural bases of decrease in reward  
sensitivity in pediatric AD/HD, RAD and CFS.
- ・第58回日本小児神経学会学術集会英語抄録奨励賞  
Takiguchi S, Fujisawa TX, Mizushima S, Saito DN, Shimada K, Okamoto Y,  
Nishikawa S, Takada S, Mizuno Y, Kosaka H, Tomoda A. The neural effects of  
intranasal oxytocin administration in reactive attachment disorder.

(3) **その他** (15件)

(TV放映)

- ・黒田公美、「脳科学で親子の絆を研究 虐待を防ぐための支援は」、NHK首都圏ネッ  
トワーク、2017.2.20放送  
[http://www.nhk.or.jp/shutoken/net/report/20170220.html?utm\\_int=detail\\_contents  
news-link\\_001](http://www.nhk.or.jp/shutoken/net/report/20170220.html?utm_int=detail_contents_news-link_001)
- ・黒田公美、「脳科学研究生かして子育て支援」、NHKおはよう日本、2017.3.15
- ・友田明美、「ストレスから脳を守れ ～最新科学で迫る対処法～」、NHKスペシャ  
ル、2016.6.9
- ・友田明美、特集「DV家庭で育ったレイカ21歳」、読売テレビ、2016.1.5
- ・友田明美、視点・論点「虐待と脳、回復の手だては」、NHK総合テレビ、2017.3.6

(動画配信)

- ・ TEDx Kumamotoshi 「愛着（アタッチメント）子どもに向き合い、親に寄り添う」  
Attachment - A guide for parents and children  
<https://www.youtube.com/watch?v=4TkL1N-EThU>

(資料・解説)

- ・ 友田明美、「第1回 児童虐待の脳への影響: 虐待と脳の関連・性的虐待による脳への影響」 in 『保育通信4 第732号』、全国私立保育園連盟協会、p40-41、2016.4
- ・ 友田明美、「第2回 児童虐待の脳への影響: 暴言虐待・体罰・DV目撃による脳への影響」 in 『保育通信5 第733号』、全国私立保育園連盟協会、p42-43、2016.5
- ・ 友田明美、「子どものみかた: 脳科学の観点から愛着障害を診る」 in 『メディカル朝日』、朝日新聞社版、p51-53、2016.5
- ・ 友田明美、「第3回 児童虐待の脳への影響: 家庭環境や親子関係の問題への気づき」 in 『保育通信6 第734号』、全国私立保育園連盟協会、p28-29、2016.6
- ・ 友田明美、「第4回 児童虐待の脳への影響: 親に寄り添うこと『養育者支援』」 in 『保育通信7 第735号』、全国私立保育園連盟協会、p14-15、2016.7
- ・ 友田明美、「第5回 児童虐待の脳への影響: 愛着障害の脳科学」 in 『保育通信8 第736号』、全国私立保育園連盟協会、p28-29、2016.8
- ・ 友田明美、「子育て支援の意義を確認する～児童虐待といやされない傷～.第6回 児童虐待の脳への影響: 虐待を受けている児童への対応、保育園（保育士）ができること」 in 『保育通信9 第737号』、全国私立保育園連盟協会、p36-37、2016.9
- ・ 友田明美、「愛着障害 前編: 愛着障害とは」 in 『小学保健ニュース 2016年8月8日号』、少年写真新聞社、2016.8.8
- ・ 友田明美、「愛着障害 後編: 愛着障害が疑われる児童と親への対応、学校（養護教諭）ができること」 in 『小学保健ニュース 2016年9月8日号』、少年写真新聞社、2016.9.8

## 7-6. 知財出願

国内出願（1件）

- ・ ストレス評価装置およびストレス状態の評価方法、島田浩二、友田明美、国立大学法人福井大学、2017.3.2、特願2017-39071